チートで不幸な転生者の奮闘記

羽木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
チートで不幸な転生者の奮闘記

【Ｎコード】
Ｎ１９７０Ｓ

【作者名】
羽木

【あらすじ】
目の前に五百円を拾った瞬間トラックに撥ねられた俺は神様（代理）からリリカルなのはの世界に転生させてもらった。とりあえずチート能力を貰い第二の人生を謳歌するために。
原作介入？　そんなめんどい事しませんよ。
そう思っていた俺に待ち受けていたのは理不尽という名の運命だった。

設定（前書き）

この小説は私の初投稿作品です。
ですので、誤字脱字や意味不明なところなどが数々とあると思いますがめげずに頑張っていきます。

設定

設定集

志宮　駈闘　（しみや　くとう）転生前　矢藤　透馬　（やとうとうま）転生後

年齢１８歳～５歳　（死亡時から転生時）

髪　黒

ＣＶ　鈴村　健一

魔力光　赤

バリアジャケット　黒いマントを羽織り、蒼黒いブレザーのような服に赤い線の模様を引いている。（ブレザーに似ているのは生前、高校生の時にブレザーを着ていたから。）

魔法資質・基礎能力

リンカーコア　Ｂ＋（のちにＡＡ）

魔力生成能力　Ａ（のちにＡ＋）

身体制御能力　Ｃ（のちにＡＡ）

空間把握能力　Ｓ

指揮官資質　ＳＳ＋

魔法戦特性

空戦特性　Ｂ（のちにＡＡ）

陸戦特性　Ｃ（のちにＡＡ）

補助特性　Ａ

近接戦闘技能　Ａ（のちにＡＡＡ）

遠距離戦闘技能　Ａ

高速詠唱技能　Ｓ＋

遠隔制御技能　ＡＡＡ

魔法理論習得度　S

総合Ａ＋（現時点）

希少技能（レアスキル）

無限知能、インフィニティ・ナレッジ、

神（代理）から与えられたチート能力。現在自分が居る世界の知識をすべて記憶している。

主人公。５００円を拾った瞬間トラックに撥ねられ死んでしまった男。生前は頭が良かったのかさまざまな発想を思い浮かぶ事が得意。その発想は彼が作ったデバイスや兵器に大きく反映していく。性格は明るく平和主義。よくその場のノリに便乗したりする（大抵その後は周りからフルボッコにされる）。だが友人が困った事があったらなにがなんでも助けに行くなど、少々正義感な所と一度決めた事は何があろうと達成させるという頑固な性格を持っている。神（代理）から転生先のあらゆる知識をもらい、そのおかげか齢六歳でデバイスマイスターになる。だが生前からの影響か身体能力が低く、彼曰くインドア派らしい。のちに烈火の将と鉄槌の騎士による虐待という名の特訓を受ける羽目になる。なぜ陸戦特性が低いくせに近接技能が高いのかというと戦闘中自分のデバイスにアドバイスをもらいながら戦っている　（デバイスに振り回されている）からである。

使用魔法

防御系

プロテクション　基本的な防御魔法。

ワイドエリアプロテクション　プロテクションの広範囲版。

サークルプロテクション　プロテクションの円球版。

スフィアプロテクション　プロテクションの遠隔版。

バリアバースト　防御系を多用する闘耶の得意魔法。文字通りバリア爆発。
ラウンドシールド　プロテクションの一方向版。プロテクションより堅い。
捕縛系
レストリクトロック　範囲対象の捕縛魔法。
チェーンバインド　魔力の鎖を生成し、対象を縛り付ける魔法。使用頻度高。
ディレイドバインド　設置型捕縛魔法。
ストラグルバインド　対象の動きを拘束し、なおかつ対象が自己にかけている強化魔法を強制解除する捕縛魔法。
フープバインド　拘束輪を対象の周囲に複数同時に発動し、輪の拘束によって対象を固定する。
補助魔法
ディバイドエナジー　魔力を対象に分け与える魔法。
バリアブレイク　魔力を付加することにより、そのバリアに干渉・破壊する。
バインドブレイク　自らにかけられたバインドを破壊する魔法。
アブソープションバインド　ストラグルバインドを元に改良した魔法。鎖の形をしたバインドを対象に巻き付け、魔力を吸収する魔法。ただし発動までの時間が長い。
移動魔法
飛行　そのまんま。
ソニックムーブ　瞬間高速移動魔法。フェイトから教わった。
攻撃魔法
エナジーショット　基本的な射撃魔法。そこそこの威力だが、真っ直ぐにしか飛ばない。
エナジーレディエイション　エナジーショット複数発射。
フォトンシューター　フェイトのフォトンランサーを見て、それを誘導弾に改良した魔法。しかし誘導弾になった代わりに威力が若干

下がった。
フォトンシューター・ファランクスシフト　フォトンシューターを複数射出する。
ディメンジョンゲイザー　パドルフォームで使用する砲撃魔法。闘耶の攻撃魔法中最強の威力で赤色の魔力光を対象に放つ。使用したら半分以上の魔力を吸い取られるので、あまり多用できない。
ブレイクスライサー　パドルフォームで使用。刃に魔力を載せて対象に叩きつける。威力は魔力に乗せる量によって変化する。

エイダ（ＡＤＡ）
ＣＶ　芳野　美樹
神（代理）からもらったデバイス。自ら独立型戦闘支援ユニットと呼び、人間同様の会話機能を持つが、冷静で論理的な思考を持つ。最初は機械らしい口調だったが、透馬やはやてを通して次第に変化していく。デバイスの分類で言うとインテリジェントデバイス兼アーマーデバイス。

スタンバイフォーム
三角形の形に目のような模様をしている。

パドルフォーム
バリアジャケット装着後右手に魔力エネルギー変換式実態剣「パドルブレード」を装備する。

ある条件で発動する形態。エイダ曰く「エイダ本来の形態」らしい。
フティフォーム

第一話　しぬ間際のあの感触って結構グロい（前書き）

なんというかキャラ作り大変です・・・・・・（泣）

第一話　しぬ間際のあの感触って結構グロい

チートで不幸な転生者の奮闘記

こんにちは、俺の名前は志宮駈闘（しみや くとう）といいます。突然ですが死んじゃいました。へ？なんで死んだのが解るかって？理由は二つ、一つ目は周囲３６０度見渡してみても真っ白い平原しかない。よく二次創作であるでしょ？死んだら真っ白い平原に居たって、まさに今がその状態。二つ目は死んだ理由。これが一番わかりやすい。俺の脳内時間五分前、道端を歩いてみると五百円を拾ってラッキーっと思ったら突然後ろからトラックに轢かれました。

・・・・・・なんというか・・・死んだ理由ショボ！！

「うぅ。死ぬならもっと劇的な死に方が良かったぁ」

「はっはっは。人生なんてそんなもんさ」

うずくまって泣いていると後ろから声が聞こえた。とりあえず目にたまった涙を拭いながら声の聞こえたほうに振り向くと

「こんちは～」

髪はボサボサで白いヨレヨレのＴシャツにＧパン。そしてで天国温泉と書かれたピンク色のスリッパを履いているおっちゃ「お兄さんだ」・・・もといお兄さんが立っていた。

「えっと。誰ですか？」

「尋ねるときはまずは自分からって言うけど、まぁいいや。どうもはじめまして、神で～す♪」

「はあ。神様ですか。・・・・・・・・・・・・・・・・・・ってはあ！？神様！？」

こんなフランクな兄ちゃんが！！？？

「まあ、代理人だから神（代理）って呼んでね」

「いや、言いづらいから。というか代理っていうことは本人どうしたの？」

そう聞いてみると、にこやかな顔で

「やだな～。五百円拾って浮かれてた瞬間に死んだ人に来るはずないじゃん♪」

「そうだよね。そうですね！その通りですね！！こんなしょうもない死に方した人に来るはずないですもんね！！わかってましたよ！！畜生！！！！」

あぁもう駄目。また涙腺が崩落する。

「おいおい、そう泣きなさんな少年。そんな少年にビックプレゼントがあるんだからよ」

「ひっく・・・ビック・・・・・・プレゼントォ？うっく」

「そうビックプレゼント！まあ、そうゆう事だから、まずはそのきちゃない鼻水を何とかしろ。俺のハンカチやるから」

言いながらズボンのポケットから折りたたまれたハンカチを差し出した。なんだこの人結構いい人じゃん。そう思いながら、俺はハンカチを鼻にあてる。

「二か月間洗ってないやつだけど」

ぶふぉおおおおおおおお～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～。

聞いた瞬間、鼻水が逆流した。

「鼻が！！はなな～～～～！！！」

「ははは！！引っかかった引っかかかった！」

「死人に鞭打つんじゃねえよっ！！」

道理で嫌な臭いがすると思った。つか誰だこいつを代理に起てた奴！

「で、そのビッグプレゼントってなんなんだ？」

なんだかんだで落ち着いた俺はさっき聞いたそのプレゼントのことを聞いてみた。

「ああ。ちょっと待ってな」
言った瞬間背中を向け、なにかゴソゴソ探している神（代理）。次腹立つことをしたら顔面殴ってやる。
「パンパカパーン。いままで馬鹿な死に方をした人十億人目突破しました～。おめでと～！」
そう言いながら、手に持ったクラッカーをパーンと弾けさせた。
「いや！まったくおめでたじゃねえから！？」
「まあまあ。そう怒りなさんな少年。記念と言っちゃなんだが前世の記憶を残したまま、転生させてやるから」
「へ？転生」
転生ってアレか？死んだ魂を別の存在として生まれ変わらせるっていうやつ。
「なに、そのご都合主義。普通転生って記憶とか罪とかそんなものをゼロにしてさせる行為だろ？」
「まあな。でも言ったじゃん記念だって。この天界じゃあなにか記念とか良い行いをした人間にはそういったボーナスってのを与えるのが規則なんでね」
「ご都合主義の塊かよ、天国ってヤツは」
「そんでな～。喜べ少年。お前の転生先はアニメの世界だ」
「へ？」
アニメってあのアニメ？監督やらスタッフやら声優やらｅｔｃの皆さんが血と汗と涙の結晶で生まれた架空のお話のあのアニメ？
「ちょっと待ってくれ。それって架空の世界なんじゃないのか？」
「たしかにお前にとっては架空の世界だな。あのなｉｆって知ってるか？」
「ｉｆ？もしもあるのならってそういう確率の事か？」
「そ、詳しい事は難しいから省くが、お前たち人間が作ったアニメの世界は人間がもしもその世界があるのならっていう、妄想と妄想が絡み合って、生まれた世界。もちろんアニメの世界だからってその世界の人はお前と同じようにちゃんと生きている。だからお前は

その世界に転生することができるんだな、これがよ」
まあ、お前は死んじまったけどなっと最後に付け足した。そんなことはどうでもいい。それよりも。
「大体は分かった。それで、俺をどのアニメの世界に連れて行くんだ？」
聞いたら、神（代理）は左手をだらしなく上に掲げた。瞬間、掌のちょい上ぐらいから鈍く光り輝き、そこから本が現れた。スゲー四次元ポケットみたい。
「ペラペラっと、・・・・・・・・・・・あったあった。へ～えらく可愛いタイトルだな」
「どんなの？」
どんな世界か分かったらしいので俺は神（代理）の横に立ち、本を盗み見た。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
おいおい。なんでこの世界なんだよ。俺絶対死んじまうよ。
本のページにはこう書かれていた。
【魔法少女リリカルなのは】と

昔、友人から勧められて（というより無理やり）見たアニメだ。タイトルはほんわか系のアニメかと思って見てみたが、無印の３話目から監督変わったのかと思うほど、趣旨が崩壊し、激戦という名のＯＨＡＮＡＳＩを繰り広げる話にチェンジしたアニメだ。ヒロイン達も「ほんとに九歳？」と思うほど、精神年齢が高く。（というより九歳の時点で将来についてなんて考えねえよ）主人公が所属する【時空管理局】もなんだか突っ込み所満載な所で、（警察と裁判所と軍隊が合体っておいおい）よくこんな組織の庇護の下で治安崩壊しないなあっと思ったほど。まあなんだかんだで面白かったけど。

「なあ、マジでこの世界に転生なのか？」
「ん？嫌なのか？」
「せめて、【け○おん】とか、【ら○☆すた】とかにしてくれよ」
痛いの嫌だもん。
「いま言った世界には悪いが転生できないんだよね。けど候補なら結構あるぞ？」
「ホント！？どんなのがあるんだ？」
「え～っと。【機動戦士ガ○ダムＳＥＥＤ】だろ？それに【ひ○らしのなく頃に】、【戦国○ＡＳＡＲＡ】、【バイ○ハザード】とかそんなもんだけど、どれがいい？」
「リリカルなのはでお願いします」
即答した俺。だって転生先、すべて血生臭い日々じゃん。それだったら非殺傷設定がついてるリリカルなのはの世界がまだ安心だ。うん、そうだ。そうに違いない。・・・・・・・・・・・・・・・・そうだったらいいな～。
「つーか、なんでそんなに嫌がんの？タイトルからして楽しめそうじゃん」
心底不思議そうに思っている神（代理）。いやもう代理でいいや。
「原作を見ろよ原作を」
どこが楽しめそうだよ。へたしたら魔王にあって一瞬で消し炭になるかも知れないんだぞ。
「原作ね～」
そう言って、また掌が光り輝き、光り終えた時にはリリカルなのはのＤＶＤを掴んでいた。
「じゃあ、見てみましょうか」
無印、Ａ，ｓ、ストライカーズ、すべてのＤＶＤを見終えた。時間

の概念がない天国って便利だなとしみじみ思う。
「いや～なんというか、個性的な女の子達だね」
笑いながら、ＤＶＤを片づける代理。いやあれは苦笑だな。あと俺をそんな憐みの籠った目で見つめるな。その目はあれか？そんな世界に転生する俺にご愁傷様ってか？ふざけんな！
「こうなったら、何が何でも原作キャラにあわずに金を貯めて、平穏な老後生活を送ってやるっ」
「転生前から、老後の事を考えているだなんて、律儀だね～お前」
代理がなんか言っているけど気にしない気にしない。さてと、まずは気になる事を聞いてみよう。
「あのさ」
「ん？」
「よくさ、こういう転生ものの二次小説をよく読むんだけどさ、主人公が転生先で原作キャラをフルボッコできるチート能力を貰ったりするんだ」
「ふんふん」
俺の話に興味本位で聞く代理。
「やっぱり、そういう能力ってくれるの？」
平和主義の俺でもやっぱりそういった最強の力にあこがれていたので聞いてみたら、代理はため息をつきながら俺の肩を掴み、また憐みのこもった目で俺を見た。
「あのさ～、いくらご都合主義な天国でもそんなもんやるわけないじゃん」
「ははは、そうだよね。普通ありえないよね～」
「まったくだ。やれるといったら、記憶の受け継ぎとその世界のありとあらゆる知識しかやらね～よ」
「なははは。そうかそうか記憶とありとあらゆる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんだって？」
いま代理はなんていった？

「今の言葉ワンモアチャンス」
「ん？だから記憶の」
「そこじゃなくて、最後の所」
今の言葉間違いじゃなかったら、それって。
「最後の所？えっとありとあらゆる知識の事か？」
「そう、そこ」
なんてこったいめっちゃいい能力じゃん。
「おまえ、それ十分チートだよ。それがあったら、俺いろいろとデバイスとか作れるよ」
代理は「あ～なるほど」と言い、ポンッと手と手を叩いた。
「なるほどね、最強のデバイスを作って魔王をフルボッコにするというわけ」
そうそう魔王をフルボッコ・・・・・・何言ってんの？
「そんな事をするわけないじゃん」
「へ？」
「デバイス作りまくって、売りさばくに決まってんじゃん！」
だって痛いのいやだもん。あとどんなに高性能なデバイスを作っても、熟練者の原作キャラに負けるの目に見えてるし。
「あっそう。そういう考えなのね」
つまんないと思ったのか、顔をそむける代理。こいつ俺にあの死と死の隣り合わせと言わんばかりの戦場に行けってか。御免こうむります。

「んじゃ、用意はいいか？」
今から転生するリリカルなのはの世界にある魔法理論やら科学知識やらさまざまな知識を頭に植え付けられすべての用意が終わった。
「あぁ、いろいろあったけど世話になったよ。ありがとう」

気に食わない奴だけど、とりあえず礼を言っておく。チートまがいな能力を貰ったしな。
「どういたしましてっと」
代理がだるそうに両手を掲げた。瞬間俺の頭上が輝いた。おお、なんか引っ張られてる。
「この光の中に入った瞬間、お前は転生して赤ん坊からスタート、ＯＫ？」
「ＯＫＯＫ」
もうどんと来いという気分です。さあ今から再スタートだ。今から会うお父さんにお母さん。見ていてください。１歳で二足歩行と言葉をすべてマスターして、３歳で高校生クラスの問題を解いて、６歳でデバイスマスターに俺はなります！
「そうそう、言うの忘れてた。お前が転生する星、地球だから」
「・・・・・・・・へ？地球？」
ちょっと待って！それじゃあデバイス作れないじゃん。リリカルなのはの世界に介入しても俺ただの一般市民じゃん！
「じゃ、頑張れよ～」
「ちょっと待てええ！！！！」
叫んだ瞬間目の前がフェードアウトした。

第二話　今気づいたけど俺って不幸体質？（前書き）

なんか更新不定期になりそうな予感・・・・・・orz

第二話　今気づいたけど俺って不幸体質？

ちょり～っす！【リリカルなのは】の世界に転生した。駈闘でございます。【リリカルなのは】の世界なので魔導師にクラスチェンジかと思われましたが、代理に嵌められ地球で転生しました。お母様の体内から出た瞬間チックショー！っと泣き吠えてやりました。チックショ～！

まあ、もう過ぎてしまった事なので気を取り直して日々を生きています。あと転生先での俺の名前は矢藤透馬（やとうとうま）という名前になりました。予定通り、一歳で二足歩行とひらがな、カタカナをマスターしました。それを見ていた両親はびっくりしていました。俺の脳みそ禁書目録並みだからね。

さて、そんな俺に二つの転機が訪れました。俺が五歳になった頃、両親の仕事の都合によって、引っ越しする事になります。しかもその場所が。

海鳴市。

なんと【リリカルなのは】の始まりとも呼べる都市じゃありませんか！

そしてもう一つの転機は引っ越し先がある家の隣であった。そのお隣さんの名字が。

八神。

これはもう神の、いや絶対代理のいたずらだろうと思いながらもお隣さんの家に訪問。

原作では八神家は娘のはやてだけであり、両親は共に交通事故で死亡という扱いになっているが、まだはやては四歳（同年代！）である為か、まだはやての両親は亡くなっていなかった。

お隣ではやてと同年代の俺はいち早く友達になり、親が共に仕事が忙しい間、はやての家に厄介になる事がしばしばありました。こういうのってやっぱりフラグというやつ？

「「「「いただきます」」」」
いつも通りの日常といつも通り親の不在で八神家に厄介になっている俺は八神家の皆さんと朝食を食べていた。
「そういえば」
味噌汁をすすっていた八神お父さん（名前は忘れた）が何かを思い出したのか箸を止めた。
「透馬君の御両親が明日帰国するんだってね？」
「そうなん？とー君」
「うん、一週間だけど休暇を貰ったから一時帰国してくるんだって」
前述でも語ったように俺の両親は忙しい。なんでも両親共に海外の大学で教師をしている。そのため俺は人生の半分ほどこの家に住んでいる。毎度思うけどうちの親って何者？あとこれなんてギャルゲー？
あとついでに補足として言っておくけど、はやてがいった【とー君】はやて専用の俺のあだ名である。
「よかったやん。帰ってくるん一年ぶりなんやろ？なにかば～っと祝おうか。なあお父さん」
話に便乗してくる八神お母さん（こっちも名前を忘れた）。というか、あんな放蕩両親にそんな大層なことをしなくてもいいですよ。もうその言葉だけで幸せいっぱいです。
「おおっ、たのしみやな～。とー君」
そう言って天使のような笑顔を見せるはやて。・・・・・・ち、ちがうもんね！俺はロリコンじゃないもんね！
「どーしたん？顔まっかっかやで」
「はやて、それ以上透馬君を困らせてはいけないよ」
救いの手を伸ばしてくれた八神お父さん。そして，娘に汚らしい目

を向けるなこの腐れ●ッチ野郎〟という顔をしながら俺に向かってほほ笑む。
・・・・・あの〜、五歳児に向かって明確な殺気を向けないでください。

朝食を食べ終えた俺はとりあえず家に帰ってきた。なにせはやてが家に遊びに来たら大抵部屋が揉みくちゃになってしまう（後片付け手伝ってくれない・・・）。
そういうわけで只今絶賛マイルームクリーニング作戦を実施中。なんだかんだで両親が帰ってくるのは結構うれしいのだ。ちょくちょく電話で声を聞いているが家に帰ってくるのは実に一年ぶりであるので。
ピンポーン！
突然インターホンが鳴った。
「ん？はやてかな。はーい、今でまーす」
ガチャ。
俺ははやてかと思い鍵を開け、ドアを開いた。
「志宮駈闘だな？」
真夏なのに真っ黒く分厚いコートを着、サングラスをかけた男が立っていた。一言で言えば怪しい。おっそろしい位に怪しい。だって、真夏にコートだよ！？怪しくないはずが無いじゃん！
「え、あの違います。俺の名前は矢藤闘・・・児・・・・・・」
・・・・・・・・・・・・・・ちょっと待て。いま言った名前。
「その反応、やはり転生者【志宮駈闘】だな」
なんで、・・・・なんでこの男は転生前の名前を知っているんだ・・・・・・！？
「・・・・・・セットアップ・・・」

黒い男は小さく何かを呟いた瞬間。黒い男の右手が発光しだし眩すぎて目を閉じた。しだいに光が止んだので目を開き黒い男を見たら、黒い男の右手には紅色の刀身をしたかなり大振りな剣が握られていた。

「なっ！？」

デ、デバイス！？なんでだ！ここは管理外世界のはずだ。デバイスならまだしも魔導師なんて居るはずが無い！

「我が主、そして我らが管理局の為に死ぬがいい・・・！」

右手に握られた大剣、いやデバイスを振り上げながら俺を見つめる。

・・・・・・だめだ、あ、足がすくんで動けない・・・！

「と一君、あそびにきたで〜」

突然、この場に似合わないのんきな声が聞こえる。はやてだ、なんで今来るんだよっ馬鹿！

「見られたか」

黒い男は振り下ろそうとした大剣を止め、はやての方に振り向く。

「なんなん？おっちゃん」

状況が掴めないのか、はやては怪訝な顔をしながら黒い男を見上げる。黒い男は俺にそうしようとした様にはやてを見ながら大剣を振り上げた。

「死んでもらうぞ、己の不幸を呪うのだな」

ちょっと待て！理由はわからないけどはやては関係ないだろ。おいっ声上げろ声！早くしろっ！

「はっ・・・・・は、はや・・・・・・・・・・・・！」

早くしろ早くしろ早くしろ早くしろ早くしろ早くしろ早くしろ早くしろ早くしろ早くしろ早くしろ早くしろ早く早い早く早く早く早く早く早い早く早く早く早く早い早く早く早く早く早く早い早く早く早く早く早い早く早く早く早く早く早い早く早く早く早く早い早く早く早く早く早く早くしろってんだろが一一一一っぶっ殺すぞ！！！！？

「はやてっ！！！逃げろ一一一っ！！！」

俺の怒声を聞いたはやては一瞬びくっと震えたが、今の状況がほん

の少し理解したか外に向かって走り出した。それと同時に振り下ろした大剣がさっきはやてが立っていた所に突き刺さった。危なかった、あと一、二秒遅れていたら真っ二つになっていた所だ。
「・・・逃がさん」
突き刺さった大剣をそのままにして、左手をゆらりとあげ、掌の先をはやてに向ける。
「砕け・・・」
小さな声で呟きはやてに向かって魔力弾を飛び出した。
俺はその時、いままで見せてくれたはやての笑顔が脳裏に浮かび上がる。
今ここで動かなかったらはやては死ぬ。
そんなのは嫌だ。別にはやての事が好きとかそんなのは関係がない。
原作介入とかもどうでもいい。
はやては俺にとってはじめての友達だ。
その友達がこんな訳がわからない状況で死ぬ羽目に合っている。
だったらどうする。どうしたらいい？
・・・・・そんなの簡単じゃないか。
俺は咄嗟にはやてと男の間に走り出す。
なにげなしに不意にはやてを見る。はは、呆けた顔をしてやがる。
あ～あ、やだなぁ、たった五年でご臨終とかどんだけ薄命なんだよ俺。
いままで色んな事があったよなぁ
この五年間の記憶が走馬灯のように駆け巡・・・・・・・・・・・・・・・って、んなわけねーだろ！！
たった五年しか生きてないのにいい思い出なんて両手の指で数えるぐらいしかないし。
つーかこんな突然死亡フラグって俺は何処をどう間違ったんだというんだ。
ああダメ、死にきれないわコレ。ちょっと！　今の無し、無しだからね。まだまだ死ねるかこんちくしょ～～～～！

そうして二度目のフェードアウトを味わった。

第三話　死んでたまるかよ！　俺はまだ十分に生きちゃいないんだっ！　とか言

更新遅れまして申し訳ありません！
別に怠くなったとかじゃありませんから。唯大学が始まったので書く時間が少なくなったんです（言い訳に聞こえますけど）。
それはともかくもう一つ謝罪があります。・・・その、これからの更新早くて一週間もしくは数日間になると思います。
ご理解できれば本当に幸いと思います。
それでは、自分の駄文にお付き合いください。

第三話　死んでたまるかよ！　俺はまだ十分に生きちゃいないんだっ！　とか言

「納得できるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
こんにちは転生者の志宮駈闘改め矢藤透馬です。
前回（数分前）でいきなり変な男に殺されてしまいました、以上。
・・・・・・・・・・・・って、ぜんぜん意味不明なんですけど！？
「また来たと思ったら第一声がそれかよ」
目の前に神（代理）が現れた。
「代理か！？　あいつは一体何なんだ！　はやてはどうした！　俺を今すぐ転生・・・グブォォ！？」
代理がアッパーを繰り出し、俺の顎を砕いた。
「無理やり一言で纏めようとすんな、余計わかんねえんだよ」
「ふぉ、ふぁいつはふぁれだ？（訳：あ、あいつは誰だ？）」
代理のアッパーカットが綺麗にヒットしたため、顎が外れたが今の俺はそんな事アウトオブ眼中である。
「お前を殺した奴の事か」
ぶんぶんと俺は首を縦に振る。
「悪いが、俺も知らない奴だ。っというか、インフィニティ・ナレッジ、を持っているからと言っても今のお前は唯の一般市民だ、そんなお前を殺すメリット自体ねえんだけどな～」
そう言いながら頭を掻く。補足として言っておくがさっき代理が言ってた、インフィニティ・ナレッジ、というのは転生する時に代理から貰った希少技能（レアスキル）の名称である。カッコいい名前だけど一般市民である俺にとっては特に意味がなかった。
「ほんひゃー、はひゃへひゃ？（またまた訳：それじゃー、はやては？）」
「ああ、少年が絶賛ゾッコン中のお嬢ちゃんなら大丈夫だ。あの男なんだかんだ言いながら少年を殺ってからはそのまま帰って行っって行きやがった。お嬢ちゃんは無傷だよ。よかったな～少年♪」

からかいながら笑う代理ウゼエ。あと絶賛ゾッコン中なんて言うな。
「そへひゃー」
あ～、くそ喋りづらい！　こうなったら。
俺は両手を頬に当てそしてそのまま。
ゴキ！　ボキ！　グギリ！
「うわ～痛そ」
「あがが！　っぷはっ、それじゃあ次だ。俺を生き返らせることは？」
顎の痛みを振り切り俺は代理に質問する。
「あ～そんな事ならお安い御用だ。こんなイレギュラーな事があったんだ。死んでも死に切れないだろうからな」
「当たり前だ！　あんな死ぬ以外の選択が無いようなゲームとほぼ同義のような状況だぞ！？　例で言うところのドラクエのゲマ戦だっ」
「ゲマ戦って、まあ確かにな。おっとそうそう少年にプレゼントがあるんだった」
「プレゼント？」
代理はいつぞやかにしたように手を光らせた後何かを持っていた。
「受け取れ少年」
そして俺に向って放り投げ、俺はそれを危なげに掴む。
「うおっとっ、危ねえ！・・・・・・なにこれ？」
それは三角形の形で真ん中に黒くて丸い模様。そしてその模様をいくつもの線で取り囲むように描かれていた。・・・・・・なんか目の形をしてるみたいで正直怖いです。
「なにこれ呪殺道具？」
「何処をどう見たら呪殺道具に見えるんだよ。まあいい起動しろ、エイダ」
『了解しました』
「うおっ！喋った！」
三角形の形をした物が掌にのっかたまま喋りだし、そして俺の目の

前に浮遊した。
「私は独立支援ユニット‘エイダ’です。よろしくお願いします、当ランナー」
「独立支援ユニットって、もしかしてデバイス？」
『一緒にしないでください』
「え？　あ、いやあのすみません」
なんか怒られた。
「ん？　エイダ・・・・・・っ、ＡＮＵＢＩＳのゲームに出て来たあのエイダ？」
「そう、ＡＮＵＢＩＳ　ＺＯＮＥ　ＯＦ　ＥＮＤＥＲＳというゲームに出て来た。高性能ＡＩ。よく知ってたな少年」
『お見事です』
「まあ、生前は小島作品好きだったし」
これはとんでもないのを貰っちまったな。エイダほどのＡＩなんてインテリジェントデバイスでも霞んでしまうほどの高性能だからな。
「そのエイダは【リリカルなのは】の世界でのデバイスに近いがまた違った奴だ。それにインテリジェントデバイスよりも演算処理や状況判断などさまざまな面で超えているが、まだ戦闘経験やその他知識が浅いのでそこら辺はお前に任せる」
ずらずらと説明する代理。だけど俺は少し腑に落ちなかった。
「聞きたい事があるんだけど」
「そして広範囲のジャミングが・・・って何？」
「こんな凄い奴を貰う事は正直嬉しいよ。でもさ、なんで今更くれるわけ？」
そう、なんで最初に会った時に希少技能（レアスキル）と一緒に渡さなかったのかが疑問だった。だってさ、こうポイッっと捨てるように渡してんだぞ？　それに代理の事だ、なにか裏がありそうで素直に喜べない。
「そんなに疑うなよ、他意は特にないんだぜ？」
「信用出来るとでも？」
「じゃあお前は戻った所でアイツにあったら勝てるか？」

「は？　俺はもう死んだんだぞ。どんな理由があっても生き返ったなんて誰が知るよ」
そういったら代理は情けないと言った風な顔をしながらため息を吐く。なんかムカつく。
「あのさ～、お前はあの男が最初になんて言ったよ？」
「っへ？　そりゃあ確か・・・・・・・・・・・っあ」
そうだ確かあの時あいつは。
「・・・お前の名前を言った、それも生前のだ。つまりあいつは天界の事を知っている、もしくは天界（こっち）の奴となにかしら繋がっているという事だ」
「じゃあ、俺がまた転生したら・・・」
「十中八九、また現れて消されるな」
背中から嫌な汗が流れた。死んだ身でも汗って掻くんだ。
「そういえば、あの男が来た時、〈管理局の為に死ね〉とか言ってたな」
「ふうん、管理局になにかしようとしたのか？」
「いや、俺はもともと管理局に入ろうとか、アンチになろうとかは全然思っていなかったんだ」
そもそも五歳児に何が出来るんだよ。それに転生する前の時も言ったように俺は戦いたくもないし原作介入なんてもってのほかと心に誓ったほどだ。ただデバイス作って管理局に売りさばこうとしか思ってないし。
「一体俺になんの恨みがあるっていうんだよ・・・・・・」
「お前に恨みがあるんじゃなくてお前の知りあいに恨みを持ってるんじゃないのか？」
「そんな知り合いなんていな・・・・・・・・・」
・・・目の前に居るじゃん。
「なんでそこで俺を見るんだよ」
「そういった関係者なんてお前以外いねえから」
だってこいつ人（というか神か天使もしくは悪魔？）に恨み買うよ

うな事してそうだし。
「おいおい、俺はなにもしてないって」
「いままでの事を振り返ってもそんな事はないって言い切れるのか？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・、うん！　ないな？」
「その間はなんだ！？　それになんで疑問形！？」
「まあ、そんな事は今はどうでもいいんだよ。それよりもこれからの事についての説明だ」
無理矢理話を変えやがった。俺の命が掛かってるんだぞ！？
「言ったように今お前を転生させたらまた殺される。だから奴の裏をかく」
「どうやって？」
それが出来ないから悩んでるんだろうに
「こういう事」
代理は右手を挙げ、俺の頭を掴みだした。
「っ何を！？」
「大丈夫、痛みは長引く」
「長引くのかよ！？」
やだやだ！　こいつまた変な事をするつもりだっ。俺はなんとか引き剥がそうとするがものすごい握力で引きはがす事が出来ない。
「ほら動くなって」
「なんの説明もしないで痛みは一瞬だとか言われたら暴れるわ！？このっ・・・・・うぐ！？」
突然体中から鋭い痛みが現れ、同時に体の奥からこれまで味わった事がない熱が込み上げてきた。
「来た来た♪」
「っ、な、にを、しやがったっ。・・・・・」
「今にわかるから安心しろ」
こんな溶けそうなほど熱くて痛みを通り超えるぐらいの激痛が走っ

てんのに安心できるかよっ・・・・・・・。
「覚え、て・・・やが・・・うぅ」
そして三度目のフェードアウトを味わった。・・・・・・もうこの感覚慣れそう。

「お～い、そろそろ起きろ～」
ペシ！　ペシ！
頬に鈍い痛みが走った。
「・・・死んでる身でも痛みは変わらないんだな」
「何を言ってんだか・・・ほら立てるか？」
代理は立ち上がらせるために手を降ろすが俺はその手を振り払った。事の発端者に助けられる筋合いなんてないんだよ。いつか殴っちゃる。
「・・・うぷ、気持ちわる」
腹から湧き上がる嘔吐感をなんとか塞き止ながら立ち上がる。あれ？　俺ってこんなに背高かったっけ？　俺は自分の体を見たとき驚愕した。
「なんじゃこりゃ・・・！」
俺の体は先ほどよりも一回り大きくなっていた。見る限り8、9歳ぐらいか？
「どうだ？　三年後の体は」
「三・・・年後？」
「そう三年後。今のお前は8歳の体だ」
俺の心情をまったく顧みずたんたんと喋る。俺はなぜそんな事をしたのかを問おうとするが体にひしひしと渦まく怠態感とじくじくと全身を虐める痛みで思考が整なえず、口を金魚のようにパクパク動かす事しか出来なかった。
「今からお前には三年後の世界に行ってもらう。その為に三年後の

体を受胎させた」
「なんで、そんな紛らわしい事をするんだよ」
代理の話を聞いていく内に痛みと怠さがが少し引いていき喋ることが出来るようになった。
「なぜって、そりゃあ三年先の世界に転生させるなんて誰が予想するよ？　それにもうお前は肉体の受胎はすんだから、死人じゃないからそのまま転生できるしな、少年も赤ん坊から始めるのは嫌だろ？」
まるで俺の思っている事をすべて見透かすように喋るので恥ずかしいような気持ち悪いような気分になった。
「そろそろ気分が良くなってきただろ。ついて来い」
人の話をまったく聞こうとせずに代理は言うだけ言ってそのまま近くのドア（さっきまでなかったのに）に向かって歩いていった。
「おいっ、ちょっと待てよ！」
さっきより痛みが引いてきたがそれでもまだ節々に響く体を鞭打たせながら代理を追いかけた。

「ぜいっ、ぜいっ、ひ、広すぎなんですけど」
なんとか代理に追いつき、一面真っ白な道を歩くことかれこれ数十分。実はループしてるんじゃね？　と思うほど先程と変わらない所を歩いていた。
「おいっ、まだ着かないのかよ」
「せっかちだな～、もう少し・・・・・・着いたぞ」
代理はそう言い立ち止まった。だが目の前には何もなく平坦な道が続くのみだった。
「何もないじゃん」
「そう思うだろ？」
パチン！

代理は手を挙げ指を鳴らす。その瞬間代理と俺の前に一人の白衣の美女が立っていた。
「なんの用ですか？　温泉ジャンキー卵臭神様」
開墾一番で失礼な事を言いやがった。だが代理はそんな言葉など耳には入ってはおらずそのまま話しだす。
「ああ、こいつをＮ５７１３世界に送ってくれ」
「こいつ？・・・ああ、あなたですか」
白衣の美女は俺に顔を向ける。
「あの、どうも」
「・・・・・了解しました。少しお待ちください」
女性は手を自分の頭上に向け指を回しだす。
「さてと、エイダそいつを頼むぞ」
『了解しました』
代理は俺の手に握られていたエイダに話しだしそして俺に向く。
「そして少年」
「な、なんだよ」
俺の方に向いた瞬間代理の顔はこれまで見たことがないような神妙なそして沈痛な面持ちをした顔を浮かべだし、その表情に俺は少し戸惑った。
「あ～その、なんだ・・・・・出来うる限り怪我すんなよ」
「は？　さっきあんなに痛めつけたのに？」
「さっきまではいいんだよ、さっきまではよ。・・・・・わかったか？」
「・・・わかったよ。痛いのは嫌だからな」
代理はそうかと呟き後ろを向く。
「用意ができました。準備は宜しいでしょうか」
いつの間にか俺達の目の前に青白い渦巻状をした穴があった。旅の扉みて～。
「えっと、痛くないよな？」
なんかゴーって唸ってるし。

「大丈夫だ。骨は拾ってやる」
「早くお入りください。時間の無駄です」
・・・なんだろう。この人達すごく辛口なんですけど。
「あ～！　くそ、行ってやるよっ！」
そういえば家って今ボロボロになってたよな。帰ったらなんて言い訳しよう。特にはやてになんて言おうっとこれからの事を考えながら目の前の恐怖から逃げ出すことに集中する。
そして俺は穴の中に入った。

「行ったか・・・・・・・・お前の運命がほんの少しでも軽くなることを望んでやるよ」
「それは無理でしょう。彼のこれまでの運命は他の神達の計画に狂いは生じていません」
少年の安否を気にしていた俺に容赦なく部下は喋りだす。わかってるよ今の俺の言葉が唯の自己満足だってことがな。
だけど。
「・・・やり切れねえな」
ぼそっと胸に締め付ける気持ちを言葉にだす。
「計画を変えたかったのならなぜ最初から言わなかったのですか？　すべてを運命の事を」
「言ったってどうせ理解しねえよ。それに言わなくたってすぐに己の運命にぶち当たるだろうからな」
まったくもってやり切れねえ。俺達のやった事の尻拭いのためにあいつを犠牲をするなんてことは。
「まあいい、この事は保留だ。計画もここまで早くなっちまったしな」
「ええ、とりあえず計画はパターンＢ２のまま続行ということで」
「そうパターンＢ２のまま・・・・・なんだって？」

「ですからパターンB2のまま続行しています」
「は？　パターンA1じゃないの？」
「昨日あなたがパターンB2のまま続行といったじゃないですか。忘れたのですか？」
昨日？　えっとたしかあの時、ああたしか雑務とかに追われてて寝不足になっててそれで・・・・・・・・・・・・・・・・・・しまった。
「何を青ざめているのですか？　気色悪いのでやめてもらえます？」
あ～どうしよう。少し計画変わっちまった。まあそこまで狂っちゃあいないけど。
「う～～ん」
ぽく・・・・・・チーン！
「よし閃いた」
俺はすかさず懐からペンと紙を取り出しそのまま書き出す。
「さらさらさらっと、これで良し」
そして書いた紙を次元扉（さっき少年が入った穴の事）に放り込む。
「これで大丈夫。事なきを得たとはこの事だ」
「馬鹿ですか？」
そうして俺達は次元扉を見つめ続けた。

第三話　死んでたまるかよ！　俺はまだ十分に生きちゃいないんだっ！　とか言

いま気づいた。
原作キャラ両親を除いてはやてしか出てないｏｒｚ
あと次回もしくは次々回ぐらいでＯＰとか入れたいと思います。
それとまだ少ししか書いていませんが感想とかくれたら嬉しいです。
まってま～す♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1970s/

チートで不幸な転生者の奮闘記

2011年10月8日23時23分発行